

ユキヤナギの促成栽培に関する試験

—— 品 種 の 特 性 に つ い て ——

八代 昇・鎌田光邦・南條一夫・富田高儀

(福島県園芸試験場いわき支場)

1 ま え が き

福島県の枝物花木は近年急激に増加し1974年の栽培面積は198haとなりユキヤナギも植栽されている。しかし導入したものはまちまちで品種の特性も不明りょうの点が多い。そこで本稿は8品種の生育状況と促成時期、促成方法の違いが開花に及ぼす影響について1973～'74年の2年間にわたって検討した結果の概要である。

2 試 験 方 法

1 枝の生育量と花芽分化

埼玉県安行より導入した8品種を1970年に株分けし、畦幅150cm、株間50cmの間隔に当園試験場(沖積砂壤土)に植栽した。1973年3月に株元から切戻しし鶏ふん200kg/10a、化成肥料(15:15:15)40kg/10aを元肥に施用して11月まで栽培した枝の生育量を調査した。

花芽分化は1973年9月25日から2週間隔に6回花芽を採取して70%のアルコールに浸漬し、随時取り出してはく皮法で調査した。

2 促成方法

1973年は11月29日から15日間隔に7回株元から枝切りし着葉枝は摘葉して7日間水揚げの後に促成を開始した。促成温度は最低夜温10℃以上、昼間は20℃前後に加温を行なった。

1974年は11月25日から1ヵ月間隔に5回切枝と株促成を行なった。水揚げは5日間、促成温度を最低夜温12℃以上、昼間20℃前後にガラス室を加温した。また促成期間中はシリンジを1日に2～3回行ない枝の乾燥を抑えた。

3 試 験 結 果

1 枝の生育量

枝の生育状況を第1表に示した、特に生育のおう盛な品種は蒲田早生Ⅱ(江原系)、寒咲、関東、岡山高性で次が蒲田早生Ⅰ(稚児桜園系)、おたふくの順となり1年間の栽培で枝切りできる枝数も多かった。し

かし、あずま、大和は枝が短く細いため2～3年間栽培し枝作りする必要があると思われる。草姿としての分枝数は枝の伸長と共に増加し、2番枝は蒲田早生Ⅱ、Ⅰとも13～18本と若干少ないがその他の品種は30本前後であった。3番枝は各品種とも50～70本程度であったがおたふくは126本と特に多く枝の先端が若干垂下した。

第1表 枝の生育状況

品 種	* 枝 数 (本)	* 枝 長 (cm)	* 枝 径 (cm)	** 2番枝数 (本)	** 3番枝数 (本)
寒 咲	49.6	85.4	5.4	29.7	76.7
おたふく	22.9	73.6	6.1	34.0	126.7
岡 山 高 性	26.0	79.3	6.1	21.5	60.3
大 和	52.4	60.0	4.7	34.7	51.1
あ ず ま	72.6	62.0	5.6	32.1	75.1
関 東	54.6	79.7	5.7	39.9	50.5
蒲田早生Ⅰ	50.9	82.5	5.9	18.8	69.9
蒲田早生Ⅱ	40.8	86.4	6.0	13.8	65.6

* 5株平均

** 生育のよい枝の10枝平均

2 花芽分化

各品種とも花芽分化開始期は9月下旬～10月上旬で、花芽発育は、おたふく、岡山高性が若干早く、蒲田早生、大和、関東と続き、あずま、寒咲が若干遅れた。しかし胚珠形成期が11月下旬～12月上旬で品種間に大きな差は認められなかった。

3 開花状況

促成時期の違いによる開花状況を開花率20%の促成所要日数で第2表に示した。12月20日の株促成で寒咲が14日、おたふく、岡山高性、大和、あずま、関東が23日～25日、蒲田早生Ⅰ、Ⅱは30～31日を要したのに対し、3月20日入室は寒咲が5日その他の品種は10日前後と各品種とも早期促成ほど所要日数を多く必要としている。

開花率は促成時期が早いほど低開花率で、11月15日入室69日切枝促成はほとんどの品種が50%以下の開花率で、未開花やブラインド率が高い。1月20日入室32日促成では70%以上の開花率となり2、3月

第2表 開花所要日数

促成方法	品 種	開 花 率 20% の 所 要 日 数				
		11/15 (25)*	12/20 (452)*	1/20 (1447)*	2/20 (1952)*	3/20 (2203)*
株 促 成	寒 咲	26.6	14.7	14.6	14.6	5.8
	おたふく	—	23.9	20.1	17.7	10.4
	岡山高性	—	23.8	20.4	16.3	10.1
	大 和	52.5	25.4	21.0	18.0	11.3
	あ ず ま	—	23.2	20.4	15.0	9.8
	関 東	—	24.8	20.1	16.9	10.4
	蒲田早生C	—	30.2	23.8	17.3	11.9
	蒲田早生E	69.0**	31.1	20.4	16.8	11.0
切枝促成	寒 咲	36.3	11.1	12.5	11.0	6.8
	おたふく	24.9	18.9	19.6	16.3	9.2
	岡山高性	69.0**	22.6	19.8	17.9	10.2
	大 和	43.6	30.9	22.2	19.6	12.6
	あ ず ま	69.0**	29.4	19.4	19.9	10.6
	関 東	65.0	30.2	20.6	16.9	10.3
	蒲田早生C	39.1	30.0	24.9	18.4	12.1
	蒲田早生E	69.0**	31.4	23.9	20.2	12.8

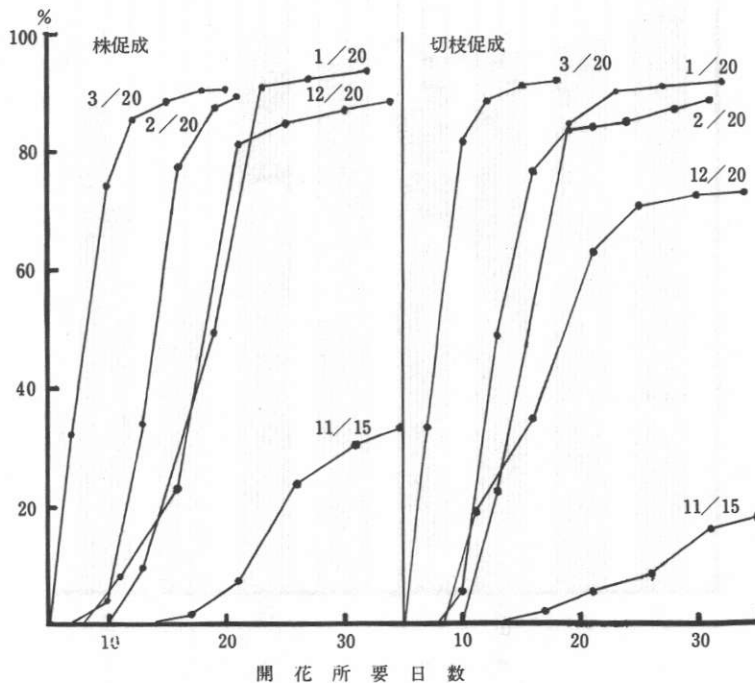
* 促成前の低温(5℃以下)遭遇時間

** 開花率20%以下

と遅くなるにつれ自然に近い開花状態であった。

品種による開花の早晩は、自然の平均開花日で、寒咲が4月13日、関東、岡山高性、おたふく、大和、

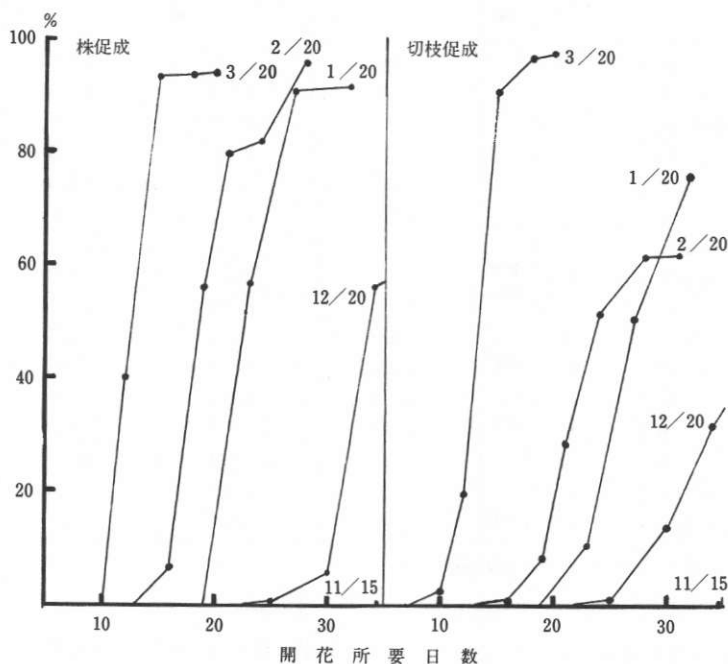
あずまが4月18日、蒲田早生E、Cは4月21日であり、促成した場合も寒咲が早く、蒲田早生が遅い傾向を示している。



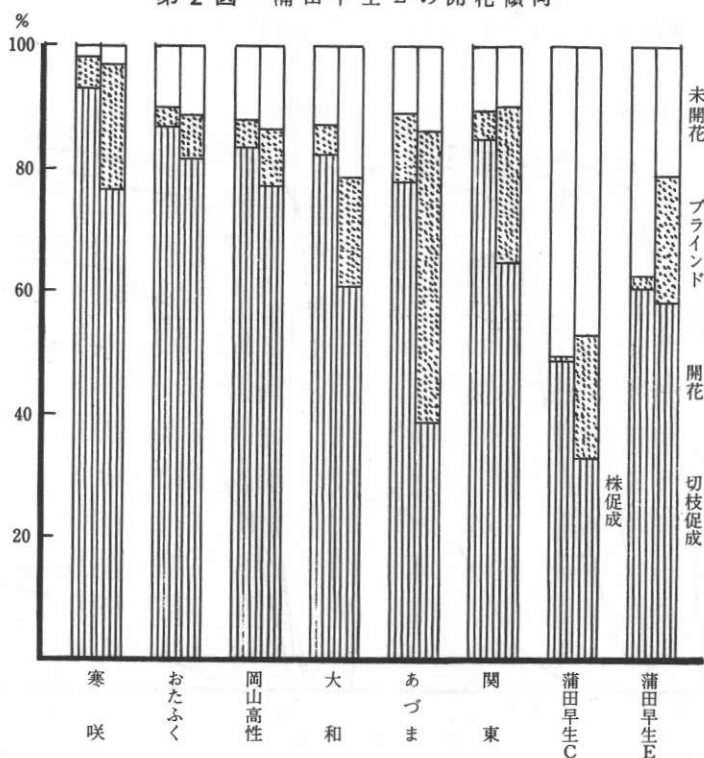
第1図 寒咲の開花傾向

第 1 図に寒咲の促成時期による開花傾向を示したが、開花所要日数が急激に短縮し開花率が高くなる入室時期は 12 月 20 日で 5℃ 以下の低温遭遇時間は 452

時間であった。また蒲田早生が 1 月 20 日ころから開花率が高くなっていることは休眠打破に低温遭遇時間を多く必要としていると思われる (第 2 図)。



第 2 図 蒲田早生 E の開花傾向



第 3 図 12 月 20 日入室 49 日促成の開花状況

株促成と切枝促成の開花傾向は第3図に示した。株促成は開花率が高くブラインド数が少ない傾向を示した、また未開花率は両促成とも大きな差は認められないところから根の有無による水揚げの影響と考えられる。この傾向は入室時期が早い場合と蒲田早生のような晩生種に顕著に現われ、入室時期が自然開花期に近づくほど株促成と切枝促成の差は減少し、品種間の開花率、開花所要日数の差も少なくなっている。

4 考 察

ユキヤナギの生育量と開花状況の特性について1973、'74年の2か年間検討した。枝の生育がおう盛で1年間の栽培で比較的多く切枝できる品種は、蒲田早生C、E、寒咲、関東、岡山高性で、おたふくは若干枝長が短く分枝が多い品種といえよう。また、あずま、大和は枝長が短いため2～3年間枝作りを行なう必要があると思われる。

花芽分化は最低気温15℃となる9月下旬から開始し12月上旬に完成したが品種間に大きな差は認められなかった。

入室時期による開花傾向は各品種とも早期促成ほど開花率が低く開花所要日数を多く必要としている。これは花芽の休眠と低温遭遇時間との関係で、11月15日促成の場合は25時間の低温遭遇時間しかなく休眠の状態のまま促成したため開花率が低かったものと思われる。各品種の開花傾向として、寒咲は各促成時期とも開花率が高く開花所要日数も短い。これは休眠が浅く低温遭遇時間が少なくても休眠が打破されるためと思われる早期促成に適する品種といえよう。また蒲田早生は休眠が深いため休眠打破に要する低温量を多く必要とすることから2月以後から自然開花期に生産する品種といえる。

促成方法として株促成は切枝促成より開花率が高くブラインド率の低い傾向を示した。これは根の有無による水揚げの難易のためと思われる、早期促成に顕著な差を示すところから休眠打破の不完全な早期促成には株促成が望ましいが、株の掘り取りや入室に多くの労力を要し、施設利用度も低いため、促成環境を整えれば切枝促成でも十分実用性があるものと思われる。

リンドウの栽植密度試験

横山 温・吉池貞蔵・小野公二

(岩手県園芸試験場)

1 ま え が き

リンドウは本県のような気温の比較差が大きく、夏が冷涼な地方において良品が得られ、栽培面積も近年急速に増加している。

本県においては実生からの育苗法が一般に行なわれており苗の入手が容易である。本畑の栽植密度は慣行では畦幅120cm、株間20cm、条間30cmの2条植(10a当たり8,333株)であるが、これに対し早期多収を

目的とした密植栽培が可能であるかどうか、10a当たり33,333株から6,666株の間で、昭和47年から49年の3カ年、収量・品質について検討した。その結果10a当たり2万本程度の密植栽培が収量も多く、経済的にもすぐれていたと報告する。

2 試 験 方 法

1 供試条件(第1表)

第1表 供 試 条 件

試 験 区	畦幅×株間 条数	試 験 区	畦幅×株間 条数
① - A 33,333 株植区	120cm×5cm 2条植	⑦ - B 33,333 株植区	120cm×5cm 2条植
② - " 22,222 "	" 7.5" "	⑧ - " 22,222 "	" 7.5" "
③ - " 16,666 "	" 10" "	⑨ - " 16,666 "	" 10" "
④ - " 11,111 "	" 15" "	⑩ - " 11,111 "	" 15" "
⑤ - " 8,333 "	" 20" "	⑪ - " 8,333 "	" 20" "
⑥ - " 6,666 "	" 25" "	⑫ - " 6,666 "	" 25" "

注. A区; 1年目から販売できるものは全部収穫した区 B区; 1年目は株当たり1本残して収穫した区、慣行区は⑪-B区(10a当り, 8,333株植)